

## 宮崎県における飼料作物の生産利用技術の実態

## 第1報 飼料作物の生産利用技術

松浦好敏・柄本 康・田村紘吉 (宮崎県畜産試験場)

Yoshitoshi MATSUURA, Yasushi ENOMOTO and Koukichi TAMURA : Culture and Utilization of Forage Crop in Miyazaki Prefecture. 1. Culture and Utilization of Forage Crop

畜産農家に対して、飼料作物の生産利用技術の改善指導を行う場合、その実態を掌握することが必要である。本県においては、1985年6月から自給飼料分析指導センター(近赤外定量分析計を使用)を開設し、これらの実態を明らかにしているところであり、その調査結果の一部を報告する。

## 1. 調査方法

畜産農家が、1985年6月から1986年3月までに自給飼料分析指導センターに提出した飼料分析申請書を基に、イタリアンライグラス309件、トウモロコシ616件、ソルガム112件、トウモロコシとソルガムの混播111件について調査を行った。

## 2. 結果および考察

1) 飼料作物の生産と利用 第1図のとおり、イタリアンライグラスは9月～10月に作付し、5月の出穂期に酪農家ではフレールハーベスターおよびモーア刈、肉用牛農家ではモーアおよび手刈するものが多い。トウモロコシは、4～5月に作付し、8月の黄熟期に酪農家では

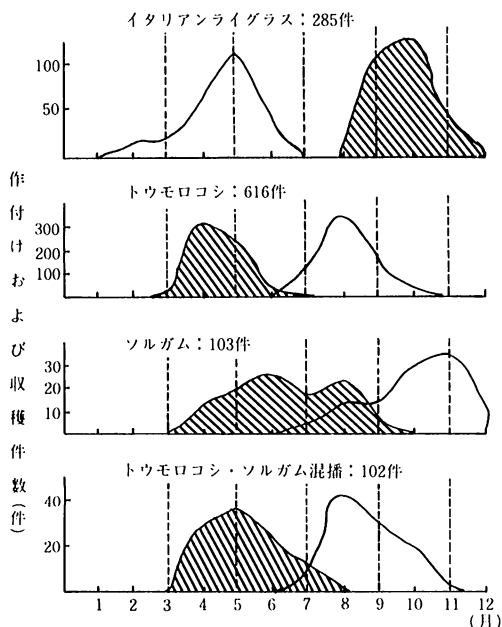
コーンハーベスター刈、肉用牛農家では手刈するものが多い。ソルガムは、6月と8月に作付のピークがあり、乳熟期に酪農家ではコーンハーベスターおよびフレールハーベスター刈、肉用牛農家では手刈するものが多い。また、他の飼料作物に比べて作付および収穫期間の幅が広いのが特徴である。トウモロコシとソルガムの混播は、5月に作付し、トウモロコシが黄熟期に達した8月にコーンハーベスター刈するものが多い。

このように、夏作の長大飼料作物には、5月以降に作付されるものも多い。これは、イタリアンライグラスの収穫のピークが5月であることが、大きな要因の1つと考えられる。このため、秋口の台風による被害を避けながら、栄養収量の多い夏作を主体とした作付体系の確立には、イタリアンライグラスの収穫時期の早期化が必要である。また、肉用牛農家については、人力による収穫が多いため、経営面積に合った小型農業機械の導入などにより、自給飼料の生産費の低減を図る必要がある。

## 2) 酪農家のトウモロコシとソルガムの混播農家率

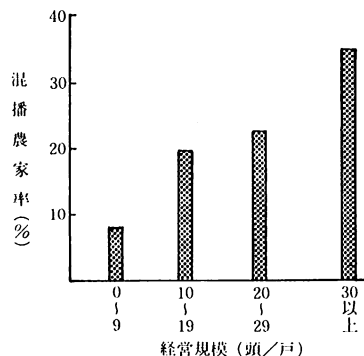
経営規模別の混播農家率を第2図に示すと、経営規模が大きくなるほどその割合が高くなり、30頭以上の規模では35%となっている。

トウモロコシとソルガムを混播で栽培するより、トウモロコシを単播で栽培する方が、栄養収量が多いと考えられる。しかし、今回の調査結果では、飼料作物の栽培技術において、一般的に先進的だと考えられる経営規模の大きな酪農家ほど混播栽培を行っているため、そのメリットの追求が必要である。



第1図 飼料作物の作付けと収穫期

■ 作付 □ 収穫



第2図 経営規模別のトウモロコシとソルガムの混播農家率(酪農家)